梅若此首途　天

911.3
7
天

文化十二年春日

随風菴

柳石

雁の首途

餞別辞

蓮二房

享保十五庚戌年也

享保のころし弥生の初ふれ行 [illegible]

うへをさくなりし旅芸の行脚と思ひ

そゝしむことはいむとなれはふかりて

そこの旅宿より一両二両のちからなうけ

襌袍の情とも見ては涙くるゝことなかりし
今はた年月とかさなるに評すこと十余年
分別なり我や古稀にちかきをもては
音となふらひこそ国に携ひに蛍の
跡の外部もしく此辺て山路ゆくに
木樵が家の住家計りおりしより風雅に
来ぬるくともなれく一万里のおもひ秘
思ふて滑稽は雲の情とよまるなり
なり

世の人は法師とよぶく此国ゆくに
侍らふは夫よりく方士が容とかりて巴暁が
謁とらはれかうくらけうし香山嵐山の
さとらひの庭とかへんとなりゆきはらくは
とて書けるなれこしの名所の人あるく
いはしが越路の家もけよ我の是途九
なるやうありしも今まさ旅愁の別を
もて春の首途のたよりがなきいつれか

むのちりうてなりんとなるさい菊のいと
まちかりしく生の萬朶の色あかゝ
春しれとゆれひさしれしさむ

源氏行

山縣連中
董二房

真むのほそくや鳥羽之百里
宮よ頭の空ちなりをりし　里紅
ゑか代ち草餘の間よ秋ゝさて　六芝
ゐい世帯よ伯母の沽法　栗几
川鵜の頭ちぬれて席はなり　東羽
とこて春上てあきあんさや　白狂

ウ

行燈もさゝで座敷は月の流れ　長良連中 泊楓

芋喰る猫の曲突(ツト)ほからね　里石

心あるもやつと宮人の衣裳候さ　呂杯

お大工衆の口とやかくれね　梨宥

照あられ霰の日掃の音となり　有琴

葉蘭ともろもも余所の錦　岑風

取ふうしなく隠居の掃除好　岐阜連中 梅周

猿の二階みよ咄のうしろく　アネ石

二

けむりかられ住もろらぬ笛　小胡

衣能の節は花人をさらぬ　吏荊

菓子もうさとさいて内うしむのさく　童平

彼岸の行ひまして傾ふく宣級　綿右

栗(アオ)菜(フキ)の益と賑味噌な衣あさて　新加納連中 与条

おゝゆらのうらもえさころね地下　里紅

青見色の身強をわもまへえらく　如柳

天満橋りしかうもちらく　野鏡

俳諧のたえいつても好なある　淇如
福灯籠ともしき一處所　蒼山
旅人もあらし生郷よりきつれ　笠松連中 達文
りうそう裾と袖ふ結ひ　了和
鐘音の見ゆる流るし町の中　摩山
沖江の祖父の斎郷より行く　楚流
稲の穂れ葎をつゝまよ白の月　荷丁
盆の笛より跡ふ輝き和　其由

君ら文人の袖よお伴の鳴らして　竹ヶ鼻連中 観公
夜いなさひの林麿こそ居る　里紅
一麻吹も捨てゝいつて世のたちと盆　佐角　右後于雀田 相庭氏
露銀る雨もふ晴れ旅遊ひ日　露伴
小網清る浪と流しきるの月　其楢
京川もうすてちるの後ち　馬童
左人のある名をいくく長(ナガ)たる　大垣連中 半岱
湯殿あそれく尋ね隠よ噴ゝ　里和

隣てはかくせし蔵の小唄かな　瑞五

宿ちて鳥よもつむ門星　東李

箸揚く語焼なひの比叡おろし　三伍

うちて見よ不化の鎗さき氣にふ　瓦竹

運首よ二日灸とさへなれ　神戸連中 季仙

保え出泊さげて紫戸　里紅

漏桶もさびふよ發り応る門　佐林

故も隣り乗く本質備へさ　杏石

豆腐枕まよ月ねと起てくれ　本公

蕎麦屋の裏もなもの杯　桂碩

乃ちとひあふ拍ひ仲ろの手習子　伊尾連中 越水

罷つゝもよとゝ押佃花を佐　里紅

山かち宿く小高の畠乃　足巳

ひりしい町の足案清てし　雲舟

母の手とを分ねて孫子も隨分い　梯意

猫も火燵の迷てとかりけれ　揚峻

三昧塚にちかき師走のおもひ寺　北方連中　琴左
紙挑灯に雪の相傘　つれ
當ひしく来ましく人を聴ながら　退く
侍隊の心取の日和くへ侍る　比稱
まんざらの顔と玉露まじの声　齋仙
柳に光るうくひすの笠　葵明

享保庚戌の冬蓮老人の谷に庵して
蕉翁行脚をおもひたちぬ此我師の
漂泊に三十余年の昔なりて旧友の
風雅にちなみしきれ／＼類に進み法り
しかるや誘ふて烏藤杖を携帯
古枝にこころを咲かせて今くまするの
眉目うして師法を広むるの時分おんり
おもくちかひの蕉翁に波のうる人を

なきれともしらしゆへに蕉翁を俳と
仰きて称するに杜甫のかたきにならぶ里
敬ふへきと此あれ師守の山にても
此時の首途をおもひし

霞よりかゝる燕や山ふところ
いかのほり

廬元坊
里紅

近江

紅にあらましかへる湖東の
佐角亭に一宿をかりて

故なしにすや之上の節て
了和

蕉翁之人ハ花の其途に東山の
行脚ありて今まて雨の心のかけよ
夜の其途をゆかしまれ

華とおもれや首途の杖のさけ
佐角

洛陽

夜のそ途と卯月の
うす曇りて　柳好堂を

白河

洛もうち晴れ春の淀ゆかし

里紅

起とあらし踊わさの寄

山只

お哥しも豆腐の家と讀捨て

各題送行路程

到背五橋

蕪子

みよかて橋のきりわたる嵐

到大佛

素六

大仏やおかくろうて秋の岸

到稲荷

播州

引しきは鳥居を潜る霰哉

到東寺

吾由

東一来く卯月の春わるゝ途に

到伏見

杜吾

卯の花まね一つみ月とあかれ

摂津

難波の浅き春と
よみて

ふるよ霞に月やおぼろて菜畑　里江

二百つゝおくれ設なの池門　野坡

西宮は錦の光途を
詠し侍れ

松なかし花の暁へら寿の峯　梅従

尼ヶ崎より西へあるき里ニ歩
今津といふ所あり浜の柳蔭をとらり松と
浜をきろは里は池田伊丹の名に並びて
あつく酒造を業とせるところを
詠して

酒蔵や松も橋の一屋所

あらくは酒里に旅ゆ旅と
なかさくて

けかる六甲の入江やよもの菜

武蔵の入江深くしむかふに清路に
見へ流りたる菊叢亭に眺望して
一瓢のあゆらや浜は行しあれ

短歌行

あしたまてあれかれや暮の市比氣　平哉
名記 祝ふ名月 帷子　重ゝ
家物の枝よ女中のまと深く　一滴
山あらましく茱の日暮る音　是張

ウ
名月の暁に秋へ入ル年の僅　菊叢
お襟の衣見えるや立てたる　哉
表の根の枯まても立き蓑子鋲　和
猪も此れく香の裁まの　滴
立ちおとそへて賣ら日暮つ足　張
帰り餡くやう斗ルてゝく　茱
名のあれル名のちらん出ル七蟹　哉
田うらル宗とよむおこ宗頭　和

むかしの姉とも月よりさしたるに　滴
鳥縫ふるにの蓋れまて　張
村雨に覆ひのかゝり待りて　棠
讃地よりくる梅を売なり　哉
田鶴の居なしや中に貫ささ　知
桑の葉よそあはぬ深きの　滴
お茎菜しおかえに月は宿てけ　張
犢のすゝりの鳴る字ちゑ　棠

ウ
跡ふるひつきて西へ焼あり　哉
白粥に皆蓋に餘き　知
おそれありて備のんしふよ餘　滴
備葉は遊に神いろく　張

名録

文机のちりやはらひてことし作　正哉
故郷よりて囲爐裏のちやかい月お　一滴

暫く留主をたのんで出る汐干かな　桃梨

梅天のはつ世やちの夕凉　南巣

鶴岡扇の絵をうけて翁には　呉張

手まくらのたのしみ時や杜鵑　芙由

餞別

高路の柳と共に清き水　一滴

草の露よりもあはれやさし一雨鶯　南巣

鶴の声よまるあこがれ余　呉張

長旅も花月も惜む京涼し　正哉

今津と云て須磨の方に近く
くはなくて道も隔りて

浮のうきこ深き松も須磨の汐

雨のふき話すゝ

評も絹をわく柳の池涼し

海士の浦とる比も田植の
さくらなれ

浮テノの盃も乙女なるや田植笠

一の谷にて

谷の名に一本残る桜かな

播磨

今宵を明石に行くれて

月龍明石によりや宵の間

翌日は尾上の鐘も聞ずなれハと
しりへく須磨に行とて

祖父の手も世話しく一節に　ちり桜

此日須磨の道すがら往昔を忍ひ行平の藻塩閑居
ようこそハ風景寛七と云人とかたらひて
須磨寺にいたりて敦盛の一ツ谷にまかり
わらは中なる鐘をわかの手の枝に浮と桜の
名ありけてありしくの事をけるハ都と共に
今ここのいわれし女語り出し　在家
宝殿堂旧の桜あと一見して泊るなり

姫路

姫路に入ね

もてしなき旅の心わきさ残そ凪の
あらしよりとりわく　つまよ
渋紙よあつめねやとりや立て鳴り
思ひ入てさくらひの名のも夕和　寒帆
秋田川縣の使つまれと名乗て声のあわと
きうねそまよふうたれ行衣と流をまて
眠ぬるまと　ともえく
まして寒くも大川行きてとき凪　之帆
柳よ民ねあまねし言隠　里紅

此比の連中にて余案ありて候く様符の
句ありさまを行やさて世をたるも之旅
かくさ時をこえれ参みなさそれたらし
さハ此秋のわらひをやしいまとうくこゝろ
春くを兼へ寒く成席よ眠とそ色空
かれこそり縣の人の心得るると
乏しける

香様杼

時ありて寒くて久しみね憐ら　秋水
月も九日の山都てあ哉　里紅

七月は宮の会息と星の咄　史幸

旅のよこれの袖は袂のむ　里紅

うしやくさくはうし年せんさくの
相くらりあるよ　如章

ひら見うし嬉ぬもおかしみ松むむ

夜ふ碑かくて寒の笠　里紅

かくれかさそとくは噺や扇のむ　東支

笠の内秋も京の祇かくれ　了紅

あと泥まま作男や寝ずの番　雁舟

冬ぞうく霜れて風の管火　了紅

ちうく見く路は京都く若清れ　傳秀

雲の絶まは鏡の嶺　了紅

主席て留れ候ほとと
文通ありて　川秀

家も併さて黄ばむもとの家

なるさ尾く　釉さて寒むすの　了紅

きのふはわが身に秋の命を借れて
けふは高野のこぼれ花とやらむ

住ひありく身や旅のうきこゝろ

龍野

そのかみ亭に宿を借られて

松の月や圓扇に高く其の山

此地にゆきては帰る事の中あれは何さらに又さと
ちかきりて給ふなのうへ跡さだめ

備前

去年の月のはじめつかた岡山の城下にやどりて老翁と
まうねおりに高名なりし其の庵を
旅籠屋にやどりて

古巣をも物うき君の新かな

ゆかれは備中の宮守に頼みしとゝめられ
立よりし人のきゝもしなれは吉備津宮に
かりて

乞宮ん大藤門の裏木立

備中

吉備の中山と聞えて、こゝは備中の吉備津宮ましまし一ツ二度とやらあるものを御託宣とかまへ、御釜と鐘をかくるに、釜鳴動してこゑもおしき時にかまの鳴動せる事なりし比山の神秘なりてゆくこゝろふとしらる

鐘の音も涼しや御釜のひゞき

念仏の何業阿も笑はそこら吾ゆゑ語らるゝ茶さとなきありしのみにかはせ金の音とこれく

あと先の音もうれし　袖幸

義塁亭に遊ぶ

村雨の足なし濡し桐のかく

ものちは宝とこまかんとて石浜亭ゆかひ岩ゆるありしは袖たよりひとつ舘ありし　ゆきりこんと祝して

まくらの梅下ありし　氷餅

素堂柳笠の二子にさそはれて三熊野に
おもむかんとする夕月の影にいと涼やか
なれは妙法の戸をひらきて石をたて道を
敷し錦を覆ふの光もさらに添へて
今宵は名月に祇園会の夜の光なれは
嵐の内涼しきうきよは祇園なりけり

川霧の節は更し夕さゝ

春柿子の隠家を訪ふ

見直さて日もかられ竹の奥庵

短歌行

義里

蒼葉や森の音にて泡つゝひ
細し水霞盃子に桂子木からみ　里紅
三合よお燗の種とけされて　松邑
素氷さとき小池の鷺影　柳笠
名月も見ろく称ふ有々物れ　芦圃
萩ころ添く伯母君の物ゝ　浅和

冷くと庵の間の話かけ　百湛

蓮の比そらと紫けも秋渋も　三稽

二雛鶯鳥も鳴なく窓よちり　白兎

ころと一夜よ行の波兄　故要

ひと梅んほうけよ晴て夢ねのも　由覧

一
名をえ嫁菜の花よ蹴鞠ひ　其遊

一
猫梅辛う菊もとよりて　和

京ゟよて寝の重ね　里

米かりよるの蝶談の仲ゟ入　笠

春よ阿古の汚さきかるさ　巴

京ひ地えしくうかいて下り船　和

海紙よろりの橋もるなり　圃

内河を稲子来交れ月の氣　雄

てふちこ三日縮よ菜の咲哉　湛

ク
あとて畳け小豆の餅焼て　要

日和あらりの待ちすかいて　兎

名紀とさへなきの有しける　蓬蓮

若葉にも白いも譲らん人の達　覧

名録

静けさや柳に風のふきかゝる　柏邑

日の岡やまくら菜の雪ふかゝる　二蓬

あるそかね世や時節の実苗会　三経

風や行脈ねいくまくしる　柳芝

去る冬も菜をましぬる海みたる　芦圃

亀にもちらす此界も朧月　百儀

よみ鳥の耳や口切に鳴く時　橋本

末遠も菊節の雨や田植時　義甫

餞別　南去婦

うつくしき涼しく夏く古風　松邑

富士も日傘にかくる暑時　甚蓮

涼風やゆふ立の雨の一しぶり　義室

前條は浜浦とひろく走る道の如し
句も又春に春とまされり

浜しほの中に世界や湊の春

去年月中旬あるの浦に遊びて松島辺に
たどりて唐の事にもまされる光景ぞ
見嘆して見るに言葉も及ばぬ詠に
嘆なきなりけらしくも去年の
観桐と語りて

あの山にそよぎさす浪の花ぞかし　里紅

春風に獲とむそふきさりし汗　文卅

春も風に流れ出るにまさりて秋
二ツ春に生れ風人と伴に

世中を百歩もとりで一歩深き

藤葉に春とふさされ春　一歩　里紅

此日を遊風し春に誘はし、それより万葉かなと
諸侯の人々まされ詣るも金毘羅詣の
道々十余人ひさしひの旅に詣てかかりて
深し　さりふ計あり　一年中に三十(みそじ)りある

女房の酒のこゝろはいて心と訓ずる字は酒の
浮けなるやうにみゆれども此八文かくれ
私中の風流なるへし名によりて清らと
まされあるつんと浮れしよ楽ねるひより
風をうら情書てわざやなる次一ゝ先山作よ
私と挑んといふは私人の苦むふ女私を
遠くよ濡れむとうり此私中をまさるへきやう
なかしとうく宮言しまる中よ氣違なる
男の細そおのれら意地とりておのくの强気と
おりこそる中の女面おもしいさ見せ出もり

あつまれさいふをいせんの女れまとつんてく候
女衆よもそうゆゑひ此私あやまちありとも
此身ひとりまてかさされまし揚りまへしと
そうあらなれ共私人とは云ふよ而を承りけ
色をとなくしてもらしうり金銀府行わの
私揚しまする身なし讃御揚子よかりて
いさゝまへしいふよりも私中するひて諷よ
私さゝるの花ゝことく詩呼のひ儀作の俤よ
是ね雪よんよ作らしまされ女の男ぶも
依てもて後見さる風情と私こそりて
感しあつうよ宗うち様来る川まして

めでたかれ御代八千代もつきぬあらん
おのづ高くよ行すゑの程

聖和學園 短大 第6595號 受入 昭36.3.14

青牛舍
翠台